

日本人のしつけと日本的性格の起源に ついての発達臨床心理学的考察 (I)

— ひきこもりの歴史・心理学的考察 —

山 添 正

A Clinical-Developmental Consideration on the Psycho-
Historical Origin of Japanese Character: Hikikomori:

— A Psycho-Historical Consideration of Apathy Syndrome in Japan. —

Tadashi YAMAZOE

要 旨

アパシーの研究者稲村博によると、アパシーの心理的問題には、歴史・心理的要因が含まれている。筆者はアパシーの歴史・心理的研究を現代の不登校・ひきこもりの事例のみでなく歴史的なアパシーの事例を引用して考察を行った。また、アパシーの遷延化・一般化による日本社会の将来のカタストロフィーの可能性について考察を試みた。

キーワード：アパシー，不登校，歴史・心理的意味，カタストロフィー

(1) ひきこもりの社会生活歴による特徴

現代の日本の学校・社会で、人間関係を結べない「不登校」とその学校を卒業したあとのかたちである「ひきこもり」と呼ばれる一群の非社会的不適応児・者が増えている。彼らの外的・社会的現実「ひきこもり」という形を取っているが、一方内的・心理的現実「アパシー」ということができる。「アパシー」

の臨床像について稲村は「過敏で、心配性、繊細で気弱」「特に対人関係に過敏で傷つきやすい、こだわりやすい」という定義を与えている。また「神経質」との違いは「神経質のほうは自己と葛藤しているが、アパシーでは、外界を遮断し、自己の小宇宙に逃げ込んでいて、一種陶酔境地に達している」¹⁾ つまり、筆者流にいいかえると「悩んでいない」ということになる。全く悩んでいないかということとはなくて、ときどき思い出したように殊勝なことをいうが、実行は難しい。ひきこもりは「外界を遮断し、自己の小宇宙に逃げ込んでいて、一種陶酔境地に達している」という定義があてはまる。以下に、ひきこもりの性格を理解するため、まず社会生活歴によるひきこもりの特長について筆者のケースを簡単に整理して述べる。

「事例史とは、個人についてどんな障害をもっているのか、なぜそのような障害を持つに至ったのかなどの問題を説明するものです。その研究の目的は、障害を持つ人により健全な発達を再開させるためには、何を成すべきか、何が実際に成し得るのか、という治療上の見通しを得る事である」²⁾

本研究は、事例を通して、ひきこもりの治療上の見通しを得る事であるが、さらに過去のひきこもりの事例と比較することで、個人の事例を越えた時代の見通しをも得ることを目的としている。

予備的事例 小学校5年生 無気力 11歳

「何事にもまったく意欲が感じられない。『勉強しよう』先生が誘っても、『別に勉強せんでもかまへん』。同級生と遊ぶことがなく、下級生の1年生と追いかけたり、追いかけられたりして上級生のような気がしない。学力は低い。しかし、国語の時間に詩を班で覚えるときみんなに励まされると覚えることがある。水泳は好きだがぶかぶか浮いているだけで注意しないといつまでも遊んでいる。地域のスポ少には行っているが、レギュラーではない。『お菓子の時間が楽しみ』といって周りを嘆かせる。陸上でハードルの練習の時、手にトンボを持ってのんびり走る。おこられるとロッカーの中に閉じこもり、友人や先

生が探して、かまってくれるのを待っている」

こうした行動が問題になる学校の体質が問題という意見もある。生活を楽しむ「意欲」はあるが、いわゆる日本経済の右上がりの時に強かった進歩向上の「意欲」には欠ける。こうした生活態度は、以下の事例3にも見ることができ。「何をやってでも食べていける」という言葉につながるように思われる。だから、気の進まない勉強とか体育とかスポーツを無理してする必要がない。彼の言動の背後にこうした時代意識があるように思われる。

事例1 中学卒業 ひきこもり 15歳

「中学2年生の夏休み明けより学校を休み出す。再登校することなく、そのまま卒業する。休みだして、先生とは初めから会うことはできなかった。ただ、しばらくは友人だけは出入りしていたが、そのうち友人が来てもでてこなくなり、家族とも話さなくなり、とじこもる。食事は、母親が部屋の外におく。引きこもって4ヶ月後、コミュニケーションが絶えたので、筆者はメモ用紙でメッセージを伝えるよう母親に助言。直接の会話はできない。顔を合わせることもなくなった。卒業式もでることなく。母にも姿を見せなくなった。しかし姉とは直接話しができる。現在まる2年が経過している。ときどき家族のいないときに近くの公園で一人でボールあそびをしているようだが、学校の休みの日は出かけない。とくに変化の兆しはない」

事例2 高校中退 16歳

「高校の夏休み前より休み出す。昼夜逆転の生活が1年続いている。食事を家族とはとらない。機嫌のいいときごくたまに一緒に食べるときがある。事例1と異なり、友人は時々やってくる。彼女もいる。しかし、家族と話しすることはなく、日中よりカーテンをひいて生活している。お金が必要なときだけ家族

におねだりに来る。アルバイトを友人からすすめられてはじめるが長続きしない。勉強が嫌いと言い続けている」

事例3 大学中退 就職—退職 22歳

「父親を幼少時に失う。小学校よりいじめられて友人がなく中学・高校も不登校気味だった。しかし大学に入り、しばらくは元気に生活していたが、友人関係につまづき部屋に閉じこもる。母親が迎えに行ったとき、下宿のカーテンを閉め切り、食事もしていない状況だった。中退して、地元の企業に就職するが、やはり休み出す。精神科に受診するがあまり積極的でない。現在昼頃起きてきて、テレビをみたり、小説を読んだりしてすごしている。カウンセリングを受けだした。『まあ、何をしてでも食べていけるでしょう』と楽観的な社会観を持っている」

事例4 教員採用試験浪人 28歳

「大学は国立の教員養成系に入学、理科系の専攻。留年を重ねたが、友だちとゼミ教授の援助のかいあって3年遅れて卒業する。その後、教員採用試験を受けるが、理科系でなく社会科で受験する。しかし、一度受けただけでその後は受けようとしなない。現在は父親の紹介で郵便配達のアバイトを週3日しているだけ。最近ある女性を追っていたことが明らかになり、ショックを受けた母親が来談」

事例5 大学中退 35歳

「高校でいじめられたことが心の傷となり、その恨みを晴らすためと言う。父親をひどく憎んでいる。投薬を受けるが嘔吐感が強く、アルバイトにでることはできない。15年間それを続ける。自分の人生を犠牲にされたといい。現在薬

を飲むことを拒否する。すると調子を崩し、嘔吐感はなくなるが、妄想がひどくなり、仕事は結局できない。そのため仕事を始めることも続けることもできない」

事例1から5をその特徴によって分類³⁾すると、まず事例1は、登校拒否遷延型、事例2は怠け型アパシー、事例3は社会生活拒否型、事例4も社会生活拒否型、事例5は病理型と分類できる。

(II) ひきこもりの歴史・心理学的考察－「高等遊民と大衆遊民」

不登校児は、中学校を卒業して進学しなければ、学校とのかかわりを失い彼らには、「登校拒否」「不登校」児という用語は該当しなくなる。むしろ用語としては「会社拒否」「不就業」者というほうが適切である。つまり、英語・数学・国語・理科・社会といった学業ではなく、仕事の問題が彼らの「実務」に変化するからである。

そうした子どもたちに会って感じるのは、「どうして仕事に結びつく自分の興味あることを一つでも育てることが出来なかったのか」ということである。

事例6 中学卒業 15歳

「中学3年間学校には来ることができず、学校のすぐ前にある老人福祉センターで老人介護ケアをしながら3年間をすごした。ヘルパー3級の資格を取り、福祉科のある高校に推薦入学が決まる。3年生を送る会に参加。介護の勉強を支えてくれた先生の彼女に贈るピアノ演奏を聞きながら激しく泣く」

スクールカウンセラーをやっていて一番感動した場面でした。彼女は学校には来なかったけれども、将来の仕事を見つけたことはなによりも意味のある勉強をしたと言える。

ところで、ある時「6ヵ月ぶりに出てきた」という18才になるある青年は、

筆者の「何を考えているの」という問いかけに「何も」と答える。「何かしたいことある」と聞いても「別に」という答えしか返ってこない。何をするために出できたかという「出てくるのが目的で、やっと出てくることができました」ということだから、筆者は「よく出てきたね」と強く褒める。

「ひきこもっている子どもにとって自室からの脱出は、一般人では世界旅行か、それ以上の意味を持つわけである。すなわち、彼が自室から家のなかへ出ていくのは一般の人ではよその県に行くくらいに相当し、その家から近所へ外出するのは外国に、そして遠く離れたハウスへは宇宙にというわけである」⁴⁾

こういう「不登校」「不就業」青年の内面をみつめると青年としては不自然な「無気力」に陥っていることが分かる。「若者は元来、生気がみなぎり、活動性や攻撃性が強いのが特徴である。それが無気力になり、自閉的になるなど、医学的に見て、生物的にもあまりにも不自然である」⁵⁾といえる。

ところで、「アパシー」「ひきこもり」の歴史・心理学的考察の手始めとして井伊直弼を取り上げてみよう。筆者は滋賀県の湖北地方に住んでいるが、近くに彦根という町があり、そこは歴史的に井伊直弼の城下として有名である。彼は若いころ、チャンスに恵まれず彦根にある「埋もれ木の館」に17歳より32歳まで蟄居していた。そのときこんな歌を歌っている。

「世の中をよそに見つつも埋もれ木の埋もれておらん心なき身は」

後に現在の総理大臣である大老にまで登り詰めるが、不幸にも日米の国際関係の発展のなかで、それを嫌う保守派に暗殺される。「心なき身」というのは、今風に言うと「モラトリアム」ということになる。「遊民」「書生」「浪人」「アダルト・チルドレン」「モラトリアム」「不登校」「登校拒否」「ひきこもり」「アパシー」「無気力」「フリー・アルバイター（フリーター）」「プー太郎」「アウトサイダー」等の用語は時代を越えて共通した創造的か破壊的かはおいてなんらかの青年の無為または無気力とかかわる精神病理現象をどこかさしているように思われる。直弼は3歳で母を失い、17歳で父を失っている。そのことが、特に母を幼少で失ったことが「世の中をよそにみる」と彼がいう「埋もれ木」時代の問題とからんでいたことは想像できる。

現代のひきこもりの青年たちのはしりは何処にあるかという点、なにも江戸時代に戻らなくても、稲村によるとすでに、明治時代に存在し、その実態についての詳しい記述は夏目漱石の作品のなかにあるという。稲村は、明治時代のひきこもり青年を漱石にならって「遊民」と名付けている。稲村は作品の分析を詳しく紹介している。⁶⁾

(1) 「虞美人草」の甲野歆悟

宗近一と比較し甲野歆悟の生活と性格をつぎのように記述している。

「宗近一も・・・仕事につかずブラブラしているが、いずれは外交官試験の準備のためである。これにたいして甲野君は内向的で線が細く、瞑想を好み、優柔不断の、思弁の人である。ほとんど口をきかないし、何を考えているのかまわりにはさっぱり分からない。一日中自室にこもり、・・・洋書ばかりをよんでいるらしい。・・・しかし別にそれによって論文をまとめようとか、感想を世に問うとかというのではない。・・・家族とも口をきかず、ただ黙々と、ブラブラした生活をつづけているのである」⁷⁾

(2) 「それから」の代助

平岡と対照しながら、「代助がまさに遊民で、毎日を無為に、無気力に過ごしている。今日のアパシーと実によく似ている。・・・にもかかわらず一向に現実的な働きをしないで、ブラブラしながら、気が向けば横文字の文学書を読んだりしている。それも、女中つきの一軒家に住み、何とも贅沢な生活ぶりである」⁸⁾

(3) 「彼岸過迄」の須永

友人の田川と比較しながら述べられている。「主人公、須永は・・・仕事につかずブラブラしている。・・・なぜか働こうとせず、自宅にこもった無為な生活を続けている。することと云ったら、少し本を読むか、若干散歩などをする程度である」⁹⁾

稲村は、現代のアパシー青年と夏目漱石の高等遊民の両者の共通点を次の10項目に整理している。¹⁰⁾ 以下の「実務忌避」は小此木のいう「モラトリアム」の特徴を示し、「時代の先端」は「おたく」のグループに分類される。

- ① 無為で非生産的な毎日を送っている。
- ② 抑うつ状態ではなく無気力である。
- ③ 長期に恒常的に持続している。
- ④ 実務を忌避し趣味的世界に浸っている。
- ⑤ 時代の先端的なものにひかかれている。
- ⑥ 男性にしかみられない。
- ⑦ 親世代には理解できない。
- ⑧ 親世代に依存している。
- ⑨ 恵まれた家庭のこどもである。
- ⑩ 激動に生きた世代の次の世代である。

この説明で殆ど問題はないのだが、稲村が、まとめたのは十年前の1988年であり現在と少し状況が変わっていると思われる。アパシーの若年化は、最近の小学生の不登校児の増加の統計数値から理解できる¹¹⁾。また高年齢化はひきこもり（結局不登校のまま卒業して進学しないと全員該当する）の増加に現れている。ところが、稲村の男子にかぎるは、女子の不登校・女子のひきこもりの増加をみると男子が圧倒的に多いのは現実だが必ずしも男子に限定出来ないし、むしろ女子にも拡大したといったほうがいいのかもかもしれない状況が生まれている。それだけアパシーの裾野がこの10年の間に広がっているのである。いわば明治時代のアパシーが少数の「高等遊民」を生み出したとしたら、現代のアパシーは「大衆遊民」を大量に生み出していると言える。

①から⑩までの逆を考えてみたい。

- ① 生産的な毎日を送っている。

- ② 何事にも意欲的である。
- ③ それが長期に恒常的に持続している。
- ④ 実務をこなし、意味ある世界に生きている。
- ⑤ (時代を超えた) ころの絆を大切にしている。
- ⑥ 性差はない。
- ⑦ 親世代も理解できる。
- ⑧ 親世代から独立している。
- ⑨ 恵まれない家庭のこどもも。
- ⑩ 激動を共有できる。

こう見てくると、「意味というものを自覚できなければ人生への意欲は出てこない」「戦争に代表されるような親の激動時代の語り継ぎの問題の大切さ」ということがひきこもりの問題を防止するのにいかに大切か見えてくる。要するにひきこもりは、親—子関係も切れており、それは思春期の子が親の依存から独立する過程からすると正しいけれども、独立して社会との繋がりの中で生きることの失敗は、個人—社会の関係が切れており、孤立して行き場所がなくこもってしまうことを意味する。いわば家族からも、社会からも切断された状態にあるのがひきこもりともいえる。したがって、ひきこもりの治療は「親子の絆の回復」だけでなく、その上にまったく新しく「人としての絆の構築」といったほうがいいように思われる。なぜなら治療の、目標は、生産的な社会生活をはじめることにあるからである。

(Ⅲ) ひきこもりの治療—ころの絆療法とは？

事例7 高校(旧制中学)一下宿「非行」「怠学」「不登校」 故人

石橋湛山は若い頃、心的なアパシーを体験し、その克服のプロセスは現代の子どものアパシーの克服の理解に役立つ。彼は山梨県の出身で、早稲田大学を出て、新聞社の社長になり、吉田内閣の大蔵大臣、1956年～57年首相。日本と

中国、日本とソ連の交流に尽力している。政治家にはめずらしく著作集を出版している。

山梨大学時代の筆者の教え子の家の近くに（増穂町）、彼の家があったので見学した。彼の中学時代（旧制）の送り方は、今の中学生や高校生を持つ親や教師によいヒントを与えてくれる。彼は、小学校時代、日蓮宗の僧侶であった父より大変厳しい教育を受けた。中学校に入ると、彼は父の知り合いの家に預けられそこから学校に通うようになった。彼は自由を得たトタン、勉強しなくなり、授業料を自分の遊びに使い込んでしまう。あげくの果てに進級できなくなり、2年も落第してしまう。 いままでいう「非行」「怠学」「不登校」と言われるものだった。しかし、彼を預かった家族は、金を使いこんでも何も非難せず、学校からお金の督促があると、黙ってそのまま払い込んだ。また2度も落第しても家人は何も言わなかった。2年間こうした生活をしていたがある日、いつものようにお金をもらった瞬間、その人の愛情を感じ、「これではいけない」とその時悟ったという。これが厳格な父だったらそうはすまなかったであろう。親子の相剋が生じたと思われる。

「湛山少年にとって、厳格そのものの父も怖かったが、それよりもいっさいの叱責を下さない預かり先の家人は、もっと怖かった。使い込んでしまった授業料を、黙って再び納めるその家の人の姿を見て、彼は深く自分の非を悟ったと記している」¹²⁾

湛山少年の心境は、明治生まれの詩人石川啄木の次の句に見事に表現されているように思われる。

「師も友も知らで、責めにき、謎に似る我が学業の怠りの因」¹³⁾

「教室の窓より逃げて、ただ一人、かの城あとに寝にいきしかな」¹⁴⁾

「途中にてふと気が変わり、つとめ先を休みて、今日も、河岸をさまよえり」¹⁵⁾

案外啄木の心理は、漱石の小説の主人公達と相通ずるものがあったかもしれ

ない。堪山はあずけられ先の家人の忍耐強い支えがあったからこそ立ち直ったのである。

(1) こころの絆療法と自殺未遂者への対応

アパシーに陥った子どもの治療は、方法としては稲村の「こころの絆」療法が有効だと思われる。

「アパシーでは特に長期の根気強い取り組みを要するからである。単に気持ちの安定や考え方の健全化を達成するだけでなく、弱さやもろさを克服しなければならない。そればかりか自己同一性つまり自分というものの確立にいたり、その上社会生活の適応にまで達する必要がある。そのためには長く苦しい歩みをしなければならず、それには強い支えが必要となる。彼らはそれが一人でできないからこそアパシーになっているのであり、社会に背を向け、自分の世界に逃げ込もうとしているのである」¹⁶⁾

稲村は、こころの絆療法について、自殺未遂者のこころの相談活動の経験より、対応方法について次のようにのべている。「自殺というのはみなこころの絆が切れたところから生じているわけで、しかも、周囲に家族や友人のみならず、治療者がいながらそうになっている」¹⁷⁾という条件を考えると、こころの絆が切れているということではひきこもりの人と自殺未遂者の心理は共通している。両者の治療で共通するのはどのようにこころの絆を取り戻すかである。

「自殺は、強い孤立無援の絶望的な心理状態においてなされる。家族もたくさんいて、外部からはそのように見えぬ様な場合でも、本人の主観では著しく孤立無援に陥っている。そこへ、一人の治療者が現れて、本人にこころからの関心を払い、必死になって理解しようとしたり、共感しようとする限りを尽くす。そして、死なないようにと直接間接に切々と訴え続ける。このことが、長い間無援の苦しみを続けており、孤独で、人との絆がまったく切れたようになっていた本人にとっては、画期的なこととなる。・・・切れてしまっていたこころの絆が周りの人と弱いながらも少しずつできはじめ、いわばそれが命綱のようになって、死の淵で彼らをつなぎ止めるのである」¹⁸⁾。

(2) 先達と同行者

上の文の内、「死」というのを、「ひきこもり」と言い換えるとそのままひきこもりの治療に当てはまる。自殺の研究より、稲村は「こころの絆療法」を提唱するが、その方法がひきこもりにおいても利用できることに気づいた。その治療の基本的なアイデアが自殺未遂者のカウンセリングの方法と同じで、充分時間をかけて誠心誠意クライアントの話を傾聴して受容し、前述したようにこころの絆を段階的に回復していくというところにおいた。それを稲村は「先達と同行者」という言葉で表現している。¹⁹⁾

「先達と同行者」の役割とは、石橋湛山の場合預かり先の家人の「金を使いこんでも何も非難せず、学校からお金の督促があると、黙ってそのまま払い込んだ。また2度も落第しても家人は何も言わなかった」というこうした態度をとれることを意味している。家族がこうした役割をとることは、至難であり場合によれば不可能である。他人がとることさえ困難な役割を家族がとらなければならないところに困難と不幸が存在するように思われる。しかし、その困難を乗り越えることができなければ、ひきこもりは生涯続く恐れすらある。「先達と同行者」の役割を達成することが困難であることは、上述したが、こころの絆療法の本当の困難は、ひきこもっている本人自身が「先達と同行者」の必要性を認めることもなく役割を理解しないところにある。それが、ひきこもりは、治療効果が上がりにくく、有効な治療薬が多い分裂病よりも治療の困難を伴い、現在精神医療、心理療法のなかで最困難な治療対象になっている理由である。

筆者は、思春期の問題を持つ子供に悩む親に会うときいつも、日本の首相になった若き日の石橋湛山を預かった家族の事を考える。彼は、他家に預けられて、「クレージーな思春期の嵐」をやり過ごすことが出来た。実の親に育てられていると、きつつぶされ、後の首相はなかったことは想像できる。

後に、彼が父に「どうして自分を他家にあずけたのか」と聞いたとき、彼の父は「孟子」の一節に「古は子をかえて、これを教ゆ」と、一言答えただけだったという。これは要するに思春期（反抗期）に入ってクレージーになった子供

を親が育てることは親子の情愛をそこなう。だから人に預けて育ててもらうのがいいのだということである。筆者は遙か昔に「クレージーな思春期の嵐」をやり過ごす知恵を持って実践していることを知って驚かざるをえなかった。

(IV) 孟子の教えと現代－「易子教之」の意味

孟子はBC289年に84歳で亡くなっているので、2370年前の中国の人である。離婁章句に出てくる一文であるが、金谷治訳を以下に引用する。²⁰

公孫丑いわく

「君子の、わが子を教えざるは、何ぞや」

孟子いわく

「なりゆきとして行ないえざればなり。教うる者は必ず正しさをもってし、正しさをもってして行なわずれば、これに繼ぐに怒りをもってす。これに繼ぐに怒りをもってすれば、すなわちかえってそこなわん。また夫子はわれに教うるに正しさをもってするも、夫子みずからは未だ正しきをおこなわざるなりとおもわば、これ父と子と相そこなうなり。父と子と相そこなえば悪し。古は子を易えてこれを教え、父と子との間にては善を責めざりき。

善を責むれば離れ、離るればよからざることこれより大なるはなし」

孟子の主張は次の3点に要約できる。

ここでは家庭教育の困難さがしみじみと語られる。昔は子どもを交換して教えあい、自分の子を教育することはなかった。それには理由がある。親のほうでは、子どもが正しい方向に進まなければ腹が立つし、子どものほうでも親が、こうするのが正しいと言いながら、その現実はだらしないと思うようになれば、もっとも大切な親子の愛情が損なわれる。それでは何を教育したところで無駄である。父と子の離反ほどよくないことはない。

(1) 「なりゆきとして行ないえざればなり」

要するにこれは、思春期には親が教師にはなれないことを言っているわけで

ある。それはまた、現代の日本の親が、石橋湛山をあずかった家人になれるかと言う問いでもある。クレージーになった我が子を、預かった家人のように扱うことができれば問題はない。しかしそれができないのが親であり、家族である。そのことが「なりゆき」である。自立して行く子供は、親の影響から離れないと行けない。動物の例がその自立と親の養育の姿を教える。

またアジア的文化とは異なるキリスト教文化を基礎に発展した西洋では「近親相姦タブー」があるので、子どもは生殖機能が発達した後、親と同居してはいけない。日本の母性社会論から行くと、親子の特に母子の一体感が強く、親も子も自立するのは難しい。日本の社会は親子の分離独立を促す要因に欠ける。したがってアジア的自立は「易子而教之」が一つのヒントかもしれない。

(2) 「不教子」

スイスで100人以上の人に面接したが、だれも「家で教育している」という人はなかった。教育の問題で子どもをいじくるという発想がない様に思えた。

(3) 「古は子を易えてこれを教え」

これは地域社会の教育の能力が思春期の子どもの教育に必要であることを主張している。親以外の人間が子どもの自立をどのように助けるか、こうした発想での地域の教育施設はない。東京で、10代20代用のホールが作られた。どうしてかと言うと高校生が公園で鬼ごっこをしていたら、近くの住民が警察に連絡してパトロールカーがやってきた。地域社会の中で高校生や中学生が遊ぶ空間がない。そのため20億円をかけてスポーツ関係の施設だけでなくロックやダンスやゲーム、その他漫画の図書館等の建設を行った。スイスでも、オペラハウスを作るぐらいだったら青年会館を造れとあって、世界の70年代の学生紛争より10年遅れて学生紛争がおこった。それでそれ以来プールがいたるところにできたという。

(4)「善を責めざりき」

父が子に対して、また子が父に対して、善事を行うように強いることはしないということである。「善を責むるは朋友の道なり。父と子と善を責むるは、情けを損なうの大なるものなり」

これはいわゆる不登校児に精神的安定を与えるため、「勉強しなさいという」勉強刺激も「学校行きなさいという」登校刺激も与えないと言うカウンセリングの方針と関連する。特に過干渉による不登校児は、親が言いたいことを言い、子供が親に遠慮していることが多い。したがってその関係が逆転することが不登校児の治療の基本方針になる。

「易子教之」という思想は、思春期において親子の絆を切らないための工夫といえる。西洋人が「子どもに生殖能力が育つと同居しない」という考えは、「近親相姦の禁止」という文明人としての自覚がそうした知恵を生み出したとも言えるが、親子のこころの絆を切らないと言う東洋の知恵と共通するものを感じる。

一方で日本でのひきこもりの多発は、日本の親子の濃密な関係を切れないうつけの質が、一つには「思春期」の動物的現実反しているため、また二つには社会的支援の不在のため、結果としてもたらされる親子の閉鎖的濃密な関係が、ひきおこしているように思われる。ひきこもりの治療とは、たとえるなら蟻地獄に落ちた虫を、外から如何に助けるかということである。ひきこもっている人たちは、外の危険から自分を守るためにあえて蟻地獄の中に逃げたと言える。それは本人が編み出した工夫のひとつといえる。しかしそれは入るは易く出るのは困難な工夫である。「本人の問題だからと子ども一人に任せ、解決しないままに時がたっていくと、子どもの中の人とつながりたい、けれども人が怖いという葛藤だけが雪だるま式に大きくなってゆき、今度は、ひきこもっていることそれ自体から抜け出すことができなくなっていく危険が生じます。かって自分を助けるために編み出した工夫が、今度は自分の社会適応を阻むものとなってしまいます」²¹⁾

表現は悪いが無限地獄とも言うべき苦境が待っている。

(V) ひきこもりの遷延化と日本の未来

本論の (I) で、不登校とアパシーの関連について触れたが、特に根拠は上げなかった。稲村によると「近年登校拒否がこじれて遷延化した事例の相談が急速に増えている。何年も、あるいは10年も、20年も無気力で引きこもった状態が続いている。その程度は、まったく外出しない重度のものから、好きな事には外出する中等度ないし軽度なものまでいろいろあるが本人の元来の能力や性格から見て著しく不本意な自己実現できていない状態である点共通している。しかも、ながびくほど退行して逃避的となり、現実を直視できず、無感動、無関心で建設的なことは一切考えなければ行動もしない」²²⁾ という経過をたどるといふ。

近年のひきこもりの増加は、これはある意味では当然の結果とも言える。不登校の遷延化はつまりひきこもりの増加を意味する。従来、不登校は①心気症期（急性期）②不穏期－暴力期（自閉期）③安定期（無為期）と進むことがほぼ一般に共通の理解だった。括弧内は高木の説である²³⁾。稲村の説とほぼ重なる。しかし筆者はアパシーの問題を考える立場からすると③の安定期と言うよりは無為期とする方がより子どもの症状の本質をとらえる表現であるように思える。

「無為期から立ち直れぬまま進めばいわゆる無気力・ひきこもり、すなわち無気力症になるわけだし、いったん回復していた人が再発すればまた上の経過を繰り返して、今度は前より無為期から回復しにくくなる」²⁴⁾ ということ、つまり不登校の遷延化とアパシーとイコールになることは自明のことであると言える。したがって専門家の間では、不登校とアパシーの関係は改めて論証する必要もないのである。稲村の研究によると10年前後の予後結果で全体の3分の1前後が無為な状態にある事を示している。これは大変な数字と言える。

ところで、この数字を単純に当てはめてみると、現在不登校は小学校2万人・中学校は8万人である。中学校の3分の1といっても3万人足らずが、無為な

状態でいつづけることになる。稲村によると遷延期が長いほど重度の引きこもりになりやすいとするなら、子どもの数が減っているのに、小学校・中学校の不登校が増えているのは不気味である。日本の未来に何か薄気味悪いものを予感するのは筆者だけではないようである。

事例 8 大学中退—精神科受診 31歳

「家族とはまったく話しをしなくなり、まるで仙人のように自室にこもり、食事は母親が部屋の前まで運んで置くといつのまにかそれをとって食べるといった生活が、もう5年ほども続いている。一度ためしに食事をしばらく運ばないようにしてみたこともある。そうすれば、すこしは外出したりもするかと考えての事だったが、これは何の効果もなく、まったく反応がなかった。そのままでは餓死しかねないと心配して、その後はまたもとのように食事を運び、衣類の洗濯など皆母親が世話をしている」²⁶⁾

「まったく反応がなかった。そのままでは餓死しかねないと心配した」という記述は、筆者に不気味な想像を刺激する。カーテンも閉め、話しをすることもなく、薄暗い部屋に食事もしないで、じっとこもっている姿は、若者の姿とはとても思えないし、また生者の姿とも思えないほど筆者のこころを凍り付かせる。

この論文を書いているとき、新たな悲劇が新聞で報道された。事例 9 はその要約である。

事例 9

「Mさん（18歳）が、一階居間で缶ビールを飲んでいたので父親が注意し、口論になった。妻と長男が止めに入り、いったんは収まったが、約30分後、風呂場からドンドンという音が聞こえたため、妻が見に行くと二人が倒れていた

という。夫が息子を猟銃で撃ち、父親はその銃で自殺した。Mさんは中学二年頃から反抗的な態度を見せるようになり、仕事や高校へいかない事をとがめられると、住まいや家具を壊すなどして荒れることから父親は悩んでいたという」²⁶⁾

湛山の事例を考えるなら、またこころの絆療法の基本を思い出すなら、「缶ビールで射殺」は、父親に対する指導の欠如が生んだ悲劇と思われる。不登校の脳波を研究した鹿児島大学医学部の研究者は、不登校児の脳波は、アルツハイマー患者の脳波と同じで「脳にほとんど血流がない」と報告している。怠けているのではなく「行こうとしてもいけない」というよりも「行こうという気持ちすら起こらない」状態なのである。

ところで、不登校に対する無理解による悲劇も恐ろしいが、筆者には本当に恐ろしいのは「青年は未来である」という古典的命題の中にあるように思われる。個人の運命を越えた、日本の将来の問題である。稲村は自分の予感を次の様に述べている。

「青年の無気力というのは、その時代の矛盾の露呈であると同時に、後に続く時代のサインと見ることができる。元来若者というのは生気がみなぎり、活動性や攻撃性が強いのが特徴である。それが無気力になり自閉的になるなど、医学的・生物学的に見てあまりに不自然だと考える」²⁷⁾

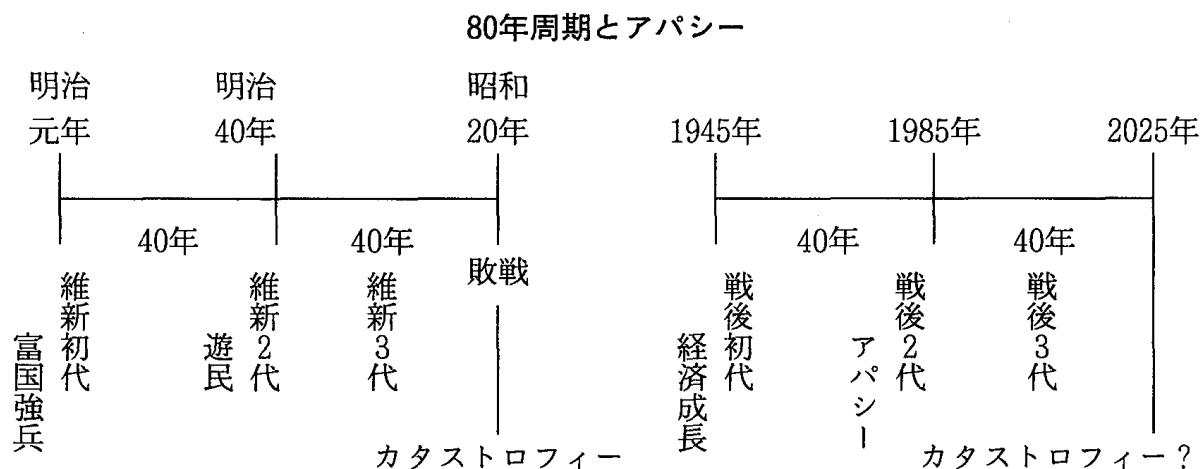
筆者はすでに別の所で述べたように、まったく同意見である。若者がひきこもっている姿の中に「無気力が未来のサイン」を読みとれないまた危機感も感じない日本人がいることが不思議というしかない。「青年たちの自浄作用、これなくしては社会が危機となる。目覚めた青年層がこの作用を失った姿が無気力であり、たとえ一部であれ、こうした青年が増える事はゆゆしい事態と見なければならぬ」²⁸⁾

最近ではインドネシアの学生の活動、またかつての中国の天安門広場での学生の運動等他国での若者の社会の不正を追求し、社会の民主的改革的の主体となって、理想に燃えて活躍している姿を見ているとその対比に愕然とせざるを得な

い。どの社会でも若者は未来であるはずである。そして大人達はその未来に、進んでまたは不承不承したがってきたのである。結局その社会の中で若者は勝利してきた。それだけにひきこもる日本の若者は無惨である。それは日本の未来が無惨であることの証ではないのか。こう考えると、一人親の責任とも言えない、先生の責任とも言えない。ひきこもりは、日本の文化と歴史が生んだ若者の国民病である。それが日本を滅ぼす可能性があるといえるのではないだろうか？

「昔は宗教家が予言者の役割を果たしてきたが、現代ではその役割はかなりの部分が臨床家に移っているように思う。目の前に連れてこられる人や、持ち込まれる問題に触れていると、未来の予兆が余りにも鮮明にそこに反映しているからである」²⁹⁾

こうした前置きの後、稲村は以下の図に見るような予言をする。2025年に日本はカタストロフィーを迎えるという。³⁰⁾



引用文献

- (1) 稲村 博 「若者・アパシーの時代」 日本放送出版協会 1991年 P51-52
- (2) エリク・エリクソン 「歴史の中のアイデンティティ」 みすず書房 1979年 P13
- (3) 稲村 博 前掲書 P22-26
- (4) 稲村 博 前掲書 P172
- (5) 稲村 博 前掲書 P84

- (6) 稲村 博 前掲書 p59-70
- (7) 稲村 博 前掲書 p61
- (8) 稲村 博 前掲書 p63
- (9) 稲村 博 前掲書 p67
- (10) 稲村 博 前掲書 p70-73
- (11) 朝日新聞 1998年8月5日 朝刊
- (12) 潮木守一「思春期における父親像」こころの科学 44 日本評論社 1992年 p70-74
- (13) 石川啄木 新編「啄木歌集」久保田正文編 岩波文庫 1993年 p59
- (14) 石川啄木 前掲書 p59
- (15) 石川啄木 前掲書 p167
- (16) 稲村 博 前掲書 p140
- (17) 稲村 博 「こころの絆療法」 誠心書房 1981年 p34
- (18) 稲村 博 前掲書 p29
- (19) 稲村 博 前掲書 p42-97
- (20) 金谷 治 「孟子」 朝日新聞社 1966年 p240-241
- (21) 田中千穂子 「ひきこもり」 サイエンス社 1996年 p24
- (22) 稲村 博 「若者・アパシーの時代」 日本放送出版協会 1991年 p57
- (23) 内山喜久雄編 「登校拒否」 金剛出版
- (24) 稲村 博 前掲書 p58
- (25) 稲村 博 前掲書 p21-22
- (26) 朝日新聞 1998年8月31日 朝刊
- (27) 稲村 博 前掲書 p84
- (28) 稲村 博 前掲書 p85
- (29) 稲村 博 前掲書 p87-89
- (30) 稲村 博 前掲書 p88

ABSTRACT

According to Dr. Inamura, Psycho-historical factors are included in psychological problem of apathy. The author investigated the psycho-historical meaning of apathy by citing a lot of cases which referred not only to current ones but also to historicals, and speculated

the possibility of social catastrophe in the future.

キーワード : apathy, school refusal, catastrophe, psycho-historical
meaning,